



大学生における自己の多元化とその規定要因

著者	浅野, 智彦
雑誌名	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. II
巻	73
ページ	119-133
発行年	2022-01-31
その他の言語のタイトル	Multiple Selves of University Students and its Determinants
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173539

大学生における自己の多元化とその規定要因

浅野 智彦*

社会学分野

(2021年9月15日受理)

要 旨

本稿は計量データによって多元的自己の機能を確認し、多元化を促進すると考えられる要因を検討するものである。用いるデータは、2020年に全国の大学生を対象として行われた調査によってえられたものだ。分析の結果、(1) 自己の多元性はアイデンティティ資本としての機能がある程度持つものの、その効果は限定的であることが示唆された。また、(2) 多元性は年齢・性別・社会経済的地位などの基本的な属性とは関係しないものの、(3) 友人関係使い分け/再帰性/メディア・コンテンツへの愛着という三つの要因とそれぞれ独立に有意な正の関連を示した。これらは多元化が進展していく際の相互に独立な三つの経路を示しており、中でも再帰性の効果が最も大きいことが確認された。

キーワード：多元的自己、再帰性、アイデンティティ資本

1. 本稿の問とその背景

1. 1 問題設定

本稿の目的は、大学生の自己アイデンティティの多元化の機能を確認し、その規定要因を検討することである。用いるデータは、2020年に全国の大学生（主に人文社会科学系の学部・学科に所属）を対象に行なった調査によって得られたものだ。

この調査は10年ごとに行われており、2020年の調査は2000年、2010年に引き続いて3回目ということになる。調査対象や調査方法が年によって異なるので、厳密な意味での比較はできないが、特に2010年データの分析結果を参考として示しながら、2020年の状況について検討していきたい。

1. 2 多元化する自己：エリクソンモデルの相対化

データの検討に先立って、問題の理論的な背景について説明しておく。

自己意識や自己意識の一形態である自己アイデンティティは、それ自体として存在するものというよりは人がその中を生きる社会の諸関係の産物として成り立っている。自己やアイデンティティが社会学に固有の主題となるのもそれゆえである¹⁾。とするなら、社会のあり方が変容し、人々が取り結ぶ社会関係の形に大きな変容が生じるとき、それと連動して自己やアイデンティティのあり方もまた変容するであろう。

このような前提の下、1980年代以降、近代社会の変容に伴う自己とアイデンティティの変容についてさまざまな議論が提起されてきた。それらの議論の中心的な論点²⁾が、自己の一貫性の弛緩、すなわち多元化であ

* 東京学芸大学 社会科学講座 社会学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

る。いくつか例をあげてみる。

ケネス・ガーゲンが注目するのは、コミュニケーション技術の発達である (Gergen 1991)。これにともなうて、人が日常的にやりとりをする他人の数は急激に増大し、そのぶんだけ自己のうちにおいて自己をまなざす他人 (ミードがいうところの客我 me) もまた数を増していくのだという。このような内なる他人の増加は、やがて個人の内的な一貫性を内側から揺るがすようになる、とガーゲンは論じた。このような自己のあり方を彼は「飽和した自己 saturated self」と呼ぶ。

ジグムント・バウマンは、コミュニケーション技術のみならず、資本主義の高度化がもたらす社会全体の流動性という観点から自己の揺らぎを理解しようとした。20世紀中盤の資本主義諸社会は企業組織をはじめとするさまざまな中間集団の枠組みによって支えられていたのだが、20世紀終盤に急速に進行した経済のグローバル化は、その枠組そのものを溶解させた、とバウマンはいう。「鉄の檻」あるいは「鉄の殻」は溶け落ち、人々は自由の名のもとに不安定な生活状況のうちに放置される。このことは「檻」や「殻」によって与えられていたアイデンティティの一貫性が、寸断されたキャリアやライフプランによって粉々に砕かれて断片化していくことを意味している。今やアイデンティティは、完成予想図を失い、ピースがいくつも欠けたジグソーパズルのようなものになってしまった、とバウマンはいう (Bauman 2000=2001; Bauman & Vecchi 2004=2007)。

バウマンほど悲観的ではないが、アイデンティティが流動化してしまったという認識を共有しているのがウルリヒ・ベックである。ベックもまた諸個人が中間集団から解放・追放されることによって、個人主義が異なった段階に入ったと指摘している。個人は、初期近代において規範的に期待されていたような「主体」であることをやめ、状況に応じて異なった主体へと自らを構築し直すようになる。それは主体ではあるが、生涯を通じて一貫した個性を持つような主体ではなく、その場限りの主体である。ベックはこのようなあり方を「準主体」と呼ぶ。グローバル化する経済の中で、準主体であることをうまく活かせる条件をもった人々は、さまざまに変化する状況を「波乗り」していく「サーファー」として生き延びていくが、そのような条件を欠いた人々は状況によって不本意に流されていく「漂流者」となるだろう。ベックはそのようにいう (Beck und Bonß 2001)²⁾。

個人主義の変容を移動性・携帯性 (モビリティ) の観点から論じているのが、アンソニー・エリオットとジョン・アーリだ。エリオットは、欲望の即時充足やたえざる変化、関係の短期性などを新しい個人主義の特徴としてあげてきたが (Elliott 2013; 2015)、アーリとの共同研究においてそれはモバイルな (携帯端末をもって移動し続けることを常態とするような) 生活様式の一部に位置づけられる。そしてそのような生活様式の普及によって「このモバイルな自己は、一生を通して一個の人格には固定されないようになってきている」と彼らはいふ (Elliott & Urry 2010=2016:137)。このような自己のあり方をエリオットは多元的アイデンティティ (multiple identities) と呼ぶ (Elliott 2013:1525 kindle edition)。

1. 3 高次の一貫性を志向する自己：エリクソンモデルの高度化

これらの議論はいずれも自己 (自我) のエリクソンモデルとでも呼ぶべきものに疑問を投げかけるものだ。すなわち、自我の統合を発達の (自然でかつ望ましい) 到達点として想定するエリクソンのモデルでは、今日の自己のあり方を記述することが難しくなっているのではないかと、これらの議論は問うているのである。それに対して、むしろ自己のあり方にとって統合はいっそう重要になってきており、また実際に実現されてもいると論じる人々もいる。

アンソニー・ギデンズは、バウマンやベックらとともに後期近代における社会変容について論じた社会学者であるが、自己アイデンティティのあり方については彼らとかなり異なった見方をとっている (Giddens 1991=2005)。まず、後期近代において社会の流動性が高まり、それへの対応として場面ごとに異なった振る舞い方をせざるを得ない状況が広がっていく、という認識においてはギデンズもバウマンやベックと一致している。そのことを前提にした上で、しかし、ギデンズが引き出す結論は彼らとは大きく異なっている。すなわち、場面ごとの振る舞い方の違いが大きくなればなるほど、それらを一貫した「物語」へと統合する必要性は高まるのであり、また実際にもそのように統合されている、というのである³⁾。つまり、ギデンズの見るところ、新しい段階に入った近代社会において、自己は多元化するどころかむしろ高次の統合を追求することに

なる。

ギデンズは、この高次な統合の根拠を一貫した物語として自分の人生を語る能力、いわば自分自身の自伝をたえず一冊にまとめあげる物語能力に求めた。これに対して、よりエリクソンのモデルに即した形でこの能力を「アイデンティティ資本」と呼んだのがジェイムズ・コテだ (Cote 2005; Cote & Levine 2002)。コテは、流動的な社会だからこそ、自分自身の人生をより柔軟に舵取りできる自我の能力が重要であるとし、その能力こそエリクソンが自我アイデンティティとして概念化したものであると論じる。具体的にいえばアイデンティティ資本には、内的統制感、自己有能感、人生における目的意識 (時間展望・主体性) やそれらを土台として他者と交流・交渉する能力などが含まれる。

1. 4 検討すべき論点

エリクソンのモデルを補助線として、それが失効したとみる立場の議論と、それが依然として (あるいはよりいっそう) 有効であるとみる立場の議論とを紹介してきた。これらの議論をふまえて、ここでは三つの論点を確認しておく。

第一の論点は、自己が実際に多元化しているといえるのかどうか、というものだ。エリクソンモデルを相対化する諸議論が多かれ少なかれ自己は多元化しているとみなしているのに対して、エリクソンモデルを高度化しようとする諸議論は多元化していないとみているとあってよいだろう。

第二の論点は、もし多元化が実際に進んでいるとして、それは人々にとって適応的な意味を持つものなのかどうか、というものだ。この点については、バックの議論の一部をのぞいて、エリクソンモデルを相対化する側も高度化しようとする側も否定的な見解に立っているように思われる。パウマンはアイデンティティの喪失を嘆いており、ギデンズはアイデンティティの多元化 (のような困った事態) は起こっていないと論じているのであるから。

第三の論点は、多元化を規定する要因は何か、というものだ。先に見てきた諸理論が流動化・個人化・再帰化などの言葉で表現しているところのものは、経験的にはどのような要因として捉えられるのだろうか。

これら三つの問題は理論的な問題であると同時に経験的あるいは実証的なそれでもあり、データによる検討を必要とする。本稿が試みるのはそのような経験的・実証的検討である⁴⁾。ただし、本稿で用いるデータは後述の通り厳密な時点間比較ができるように設計されたものではないので、第一の論点についてはあくまでも参考程度にとどめ、第二、第三の論点にしぼって分析を行う。

1. 5 利用するデータの説明

本稿で用いるのは青少年研究会が2020年に実施した大学生調査 (以下2020年調査と呼ぶ) のデータである⁵⁾。調査の概要は以下に示すとおりである。

- ・調査名称: 「大学生の生活と意識に関する調査」
- ・調査主体: 青少年研究会
- ・調査対象: 1061名 (全国の国公立および私立大学19校の社会学系授業の受講者)
- ・実施期間: 2020年9月24日～11月6日
- ・配布回収方法: オンラインアンケートフォームを用いた集合式調査 (一部質問紙配布)

対象となる大学は、設置主体、所在地、入学難易度、共学・別学などの要因を考慮してできるだけ偏りのないように選びだした。具体的に言うと、国公立大学が7校、私立大学が12校 (内1校が女子大学) となる。回答者の性別は、男性が35.2%、女性が63.2%、学年は2年生が45.3%、3年生が23.1%、1年生が21.4%となっており、女性・2年生がやや多くなっている点に注意が必要である。

この調査は、10年ごとに行われており、2020年の調査で三回目となる (初回は2000年、二回目が2010年)。ただし、毎回異なった大学で行っていることや、今回は配布回収の方法も異なっていることなどから、時点間の比較は難しい。そのため、以下の分析ではあくまでも参考という形で主に2010年のデータを必要に応じて紹介していく (以下2010年調査と呼ぶ)。2010年調査の概要は以下の通りである。

- ・調査名称：「大学生の生活と意識に関する調査」
- ・調査主体：青少年研究会
- ・調査対象：2831名（全国の国公立および私立大学26校の社会学系授業の受講者）
- ・実施期間：2010年9月
- ・配布回収方法：授業時間を用いた集合式調査

2010年調査の結果については別の場所で報告しており（浅野 2011）、本稿ではそれと対比できる場合にはできるだけ同じ項目を用いて分析を行うことにする。

2. 自己の多元性を得点化する

まず自己の多元性を得点化するところから始める。

2020年調査、2010年調査ともに大学生の自己意識についてはほぼ同じ文言で質問をしている。2010年調査から引用すると以下のものがそれに当たる。ただしこのうち2つについては2020年調査で尋ねていない。

意識して自分を使い分けている
会う相手に応じて、服装・髪形・化粧などを使い分ける方だ（2020年調査にはない）
場面によってでてくる自分というものは違う
自分がどんな人間かわからなくなることがある
どこかに今の自分とは違う本当の自分がある
自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある
自分には自分らしさというものがあると思う
どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だ
他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ
今のままの自分がいいと思う
自分の欲しいものをがまんするのが苦手だ（2020年調査にはない）
自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ

2010年調査データの分析ではこれらの質問項目を投入した探索的因子分析を行い、4つの因子を得た（多元性因子、拡散性因子、独自性因子、同調性因子）。これらのうち多元性因子が自己の多元性に関わると考えられるもので、以下の三つの質問項目について因子負荷量が高くなっている。

意識して自分を使い分けている
会う相手に応じて、服装・髪形・化粧などを使い分ける方だ
場面によってでてくる自分というものは違う

これら三つを単純に合算したものを多元性得点とみなし、以下にみるようないくつかの分析を行った。

2020年調査データについてもこれと同様のやり方で多元性を得点化する。

まず上記の質問項目を投入した探索的因子分析を行う（最尤法、プロマックス回転）。最初の試行で共通性の小さかった項目（「自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ」）を外した上で、三つの因子を抽出する⁶⁾。結果を表1に示す。因子負荷量をもとに第二因子が自己の多元性に関わる因子であると解釈し、これを自己多元性因子とする（他の2つも同様にして、自己確信因子、自己不透明因子と命名しておく）。

表1 因子分析の結果 (各質問項目への因子負荷量)

質問項目	自己確信因子	自己多元性因子	自己不透明因子
他人とは違った, 自分らしさを出すことが好きだ	0.714	0.012	-0.011
どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だ	0.653	-0.206	0.206
自分には自分らしさというものがあると思う	0.622	0.125	-0.259
意識して自分を使い分けしている	-0.031	0.687	-0.043
場面によってでてくる自分というものは違う	-0.045	0.584	0.12
自分の中には, うわべだけの演技をしているような部分がある	-0.038	0.499	0.382
どこかに今の自分とは違う本当の自分がある	0.204	0.184	0.585
自分がどんな人間かわからなくなることがある	-0.02	0.167	0.583
今のままの自分でいいと思う	0.251	0.182	-0.472

自己多元性因子に関わりの強い三つの項目間の一貫性についてクロンバックのアルファをみると0.66となる。一貫性を想定するのに十分な水準と判断し、三つを足し合わせて自己多元性の得点とする⁷⁾。以下の分析ではこの得点を用いる。

3. 自己の多元性はアイデンティティ資本として機能するか

3.1 2010年調査の結果

自己の多元性が現代社会において適応的なのかどうか、という点から検討していこう。

何をもって適応的と呼ぶのかについてはさまざまな立場があり得るが、ここでは先に紹介したジェイムズ・コテの議論をふまえてアイデンティティ資本という概念に準拠する。つまり、多元性がアイデンティティ資本と正の関係にある場合にそれを適応的であるとみなすことにしよう。

そこで、あらためてアイデンティティ資本について定義風に述べるなら、個人が自らの人生を戦略的に構造化し、中長期的に満足いく生活を達成するために必要とされる認知的な諸能力、となる (Cote 2005)。より具体的にいうとそれは、内的統制感、自己有能感、人生における目的意識 (時間展望・主体性) やそれらを基盤として他者と交渉する能力などからなっている。そして、このような諸能力は、ライフコースの流動化・不安定化が進む今日の社会においてその重要性を高めているとコテはいう。

2010年調査、2020年調査のいずれにおいても、これらの能力のすべてについて尋ねているわけではないが、比較的趣旨の近い質問項目を選び出し、得点化した上で、それらに対して自己多元性得点がどのような関係にあるのかを検討する。まず、参考までに2010年調査データの分析結果を要約した表を以下に示す (表2)。

表2 2010年調査データ分析結果の要約

	自己肯定感	自己有能感			時間的展望	対人関係 スキル得点	自己啓発 志向得点
		特技	外見	勉強 友人関係			
性別		++	++	++			
年齢	+	++	++		+		+
暮らし向き	++	++		++		++	+
大学難易度				++		--	-
大学所在地	+				++	+	++
自己多元性得点	+	++	++	++	++	++	++

+の符号は有意な関連性が見られた変数および関連性の正負を示す。符号が二つの場合は1%水準、一つの場合は5%水準で有意

この分析では、自己肯定感、自己有能感、時間的展望 (有無の2値変数)、対人関係スキル得点、自己啓発志向得点をアイデンティティ資本の構成要素とみなし、それぞれを従属変数とする重回帰分析・二項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数として投入されたのは、性別、年齢、暮らし向き、大学難易度、大学所在地などの統制変数と自己多元性得点である。正負の符号は、各独立変数が有意な効果を持っていること、およびその方向性を示す。符号が一つのみの場合は5%水準、二つの場合には1%水準で係数が有意であること

を示している。

一瞥してわかるように、基本属性を統制した上でなお自己多元性得点はほとんどの従属変数に対して有意な正の効果を持っている。このことから2010年調査からは自己の多元性は、適応的な意味を持っているという結論を引き出した(浅野 2011)。

3. 2 2020年調査の分析

同様の分析を2020年調査のデータを用いて行う。ただし、自己有能感に関わる質問を2020年調査ではたずねていないので、これをのぞいた分析となる。

第一に、自己への好悪を従属変数とする重回帰分析を行う。結果を表3に示す。

表3 自己への好悪を従属変数とする重回帰分析
*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数
(Intercept)	1.564 ***
女性ダミー	-0.051
年齢	0.000
暮らし向き	0.094 ***
入学難易度	-0.002
大都市部ダミー	-0.012
自己多元性得点	-0.046 ***
調整済みR二乗値	0.028 ***

モデルの説明力は低い(調整済みR二乗値:0.028)が、0.1%水準で有意となっている。自己好悪と有意な関係を持っているのは暮らし向きと自己多元性得点で、前者は正の関連、後者は負の関連となっている。先に述べたとおり、2010年調査との直接的な比較はできないのだが、多元性と自己好悪の関連が二つの時点で逆になっていることに注意しておこう。

第二に、時間的展望を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析を行う。時間的展望については、現在志向、過去志向、未来志向、無志向の4つの選択肢で尋ねており、ここでは無志向を「時間的展望なし」とし0を割り当て、それ以外をまとめて「時間的展望あり」として1を割り当てる(前者は回答者の29.3%、後者は70.7%)。結果を表4に示す。

表4 時間展望の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析
*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	偏回帰係数
(Intercept)	0.501
女性ダミー	-0.050
年齢	0.018
暮らし向き	0.193 **
入学難易度	-0.001
大都市部ダミー	-0.345
自己多元性得点	0.130 ***
Hosmer-Lemeshow	0.424
Nagelkerke	0.035

Hosmer-Lemeshow検定の結果は良好であり、モデルは統計的に優位であると判断される(Nagelkerkeの疑似決定係数は0.035)。時間的展望の有無と統計的に有意な関係を持っているのは暮らし向きと自己多元性であり、

その関係の方向はともに正である。

ただし、ここでいう時間展望は現在志向・過去志向・未来志向をまとめたものであることに注意しよう。時間意識の4つの方向性ごとの自己多元性得点の平均値を分散分析によって検討すると、方向性ごとの平均値には有意な差が見いだされ、その値の順番に並べると、過去志向>未来志向>現在志向>無志向となる。チューキーの多重比較を行った結果、過去志向>現在志向、過去志向>無志向、未来志向>無志向の三つの組み合わせが有意となり、総じて過去志向における多元性得点の高さが確認される。

第三に、対人関係スキル得点を従属変数とする重回帰分析を行う。対人関係スキル得点は、以下の質問項目を用いて算出する⁸⁾。すなわち、いずれも4件法で尋ねているので、「あてはまる」から「あてはまらない」までの各項目に4点から1点を割り当てた上で合算する。

- 誰とでもすぐ仲良くなれる
- 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる
- 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている
- まわりの人たちとの間でトラブルが起きても上手に処理できる
- 感情を素直にあらわせる

このモデルの説明力は統計的には有意ではなかったため結果は省略する。いずれにせよ偏回帰係数で従属変数と有意な関係を示したのは暮らし向きのみで、自己多元性得点には有意な関係を持たないと判断される。

第四に、自己啓発的態度の得点を従属変数とする重回帰分析を行う。自己啓発的態度の得点化には、以下の質問項目を用いる（いずれも四件法）⁹⁾。

- 新しいことを学ぶことに熱心になる
- わからないことや知らないことを自分で積極的に調べようとする
- 自分で立てた予定通りに実行することが好きだ
- 物事に真剣に取り組まないのはかっこ悪い

これら4項目の一貫性を確認するためにクロンバックのアルファを算出すると0.642となり、一応の一貫性が認められる。そこで「あてはまる」から「あてはまらない」までの各項目に4点から1点を割り当てた上で合算したものを自己啓発的態度得点とする。

これを従属変数とする重回帰分析の結果を表5に示す。

表5 自己啓発的態度を従属変数とする重回帰分析
*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数
(Intercept)	10.659 ***
女性ダミー	-0.030
年齢	0.119
暮らし向き	0.047
入学難易度	0.006
大都市部ダミー	-0.232
自己多元性得点	0.147 ***
調整済みR二乗値	0.017 ***

モデルの説明力は高くない（調整済みR二乗値：0.017）が、0.1%水準で有意となっている。自己啓発的態度に対して有意な関係をもつ独立変数は自己多元性得点のみで、0.1%水準で有意な正の関係を示している。

以上の結果を要約したのが表6だ。

表6 2020年調査データ分析結果の要約

	自己への好悪	時間的展望	対人関係 スキル得点	自己啓発 志向得点
性別				
年齢				
暮らし向き	++	++		
大学難易度				
大学所在地				
自己多元性得点	--	++		++

+-の符号は有意な関連性が見られた変数および関連性の正負を示す。符号が二つの場合は1%水準、一つの場合は5%水準で有意

先に示した2010年の結果(表2)と見比べてみると、各従属変数への自己多元性得点の関係がやや異なっている様子がうかがわれる。すなわち、時間的展望と自己啓発的態度についてはいずれの時点でも有意な正の関係が確認されたものの、自己への好悪については正の関係(2010年)と負の関係(2020年)、対人関係スキルについては正の関係(2010年)と無関係(2020年)という違いが見いだされる。最初に断ったように、両時点の調査は対象や方法が異なるため、厳密な意味で比較をすることはできないのだが、アイデンティティ資本としてみたときの自己多元性の意味合いが変化している可能性を示唆する素材であるとはいえるかもしれない。

ともあれ時間的展望、自己啓発的態度に関して正の関係を示す限りにおいて、自己多元性はアイデンティティ資本と親和的であるが、自己への好悪や対人関係スキルについては親和的であるとはいいがたい。自己多元性は、社会関係の流動化という文脈においては、自己が生き延びる上で適応的な価値をもつのではないかと、というのが当初の仮説であった。この仮説が上の結果によって棄却されるというところまではいかないが、少なくとも強く支持されたとまではいえないだろう¹⁰⁾。

4. 自己多元性を規定する要因を探る

4. 1 基本属性のみによるモデル

次に、自己の多元性を規定する要因を検討していく。

参考までに2010年調査の結果から言えることをまず確認しておこう。自己多元性得点との関係を個別に見ていくと、基本的な属性のうち性別・暮らし向き・大学所在地(大都市部所在に1を割り当てたダミー変数)との間に有意な正の関係がみられた。つまり、女性で暮らし向きがよく、大都市部に位置する大学の学生において多元性得点は有意に高くなっていた。

これらの関係をより正確に推測するために、上記に加えて年齢と入学難易度も一緒に独立変数として投入し、自己多元性得点を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果を表7に示す。

表7 自己多元性得点を従属変数とする重回帰分析(2010年)
*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数
(Intercept)	7.057 ***
女性ダミー	0.400 ***
年齢	0.031
暮らし向き	0.079 *
入学難易度	0.005
大都市部ダミー	0.207 *
調整済みR二乗値	0.013 ***

調整済みR2乗値は0.013となり、あまり高い説明力をもつとはいえないが、0.1%水準で有意である。この結果からは、やはり性別・暮らし向き・大学所在地が有意な関連を示す一方で、年齢および入学難易度が有意な関連を示していないことが読み取られる。

同様の分析を2020年調査のデータを用いて行ったところ、モデルの説明力は有意なものとはならなかった(表は省略)。また、それらの独立変数に加えて、現在の家財、15歳時の家財、父学歴・母学歴を投入してみてもモデルの説明力は有意な水準に達しなかった(表は省略)。厳密な比較はできないが、2020年調査データにおいて、自己多元性はそれらの基本的な属性からは説明されにくいものとなっているようだ。そこで以下では、これら基本的な属性を統制変数としてとらえなおし、他の意識や態度とどのような関係を持っているのかを探っていくことにする。

4. 2 友人関係との関係

自己の多元性が、多様な場へのその都度の適応の帰結だとしたら、友人関係との間に何らかの関係が見いだされそうである。そこで友人関係(あるいは人間関係一般)についてその都度の適応を示すと考えられる項目を独立変数として投入し、その効果を検討してみよう。

第一に、「その都度の適応」の典型的なあり方である友人関係の使い分けについて確認する。2020年調査ではこれについて「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けしている」(4件法)という質問文で尋ねているので、その結果を独立変数として投入する(表8)。説明力は5%程度と非常に小さいが、統計的には0.1%水準で有意となっている。使い分けをする度合いが高いほど、多元性得点も高くなる傾向が確認される。

表8 自己多元性得点を従属変数とする重回帰分析
*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数
(Intercept)	9.677 ***
女性ダミー	-0.277 *
年齢	-0.043
暮らし向き	0.047
入学難易度	0.015
大都市部ダミー	-0.271
友人使い分け	0.506 ***
調整済みR二乗値	0.052 ***

「複数のアカウントを使い分ける」こととの間に正の関係が見いだされるのも同じ事情によるものであろう。

第二に、このような使い分けを行う前提となる対人関係への感覚について確認する。先に対人関係スキル得点を構成する際に用いた質問項目の一つ「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」(4件法)を独立変数として投入する。モデルの説明力は0.1%水準で有意となる(調整済みR2乗値は0.024, 結果表は省略)。表情や仕草で相手の思っていることがわかるという度合いの高い人ほど、多元性得点も高くなる傾向が確認される(偏回帰係数は0.1%水準で有意)。

第三に、このような対人知覚は同時に、自分に対する他人の視線への敏感さにもつながっている。すなわち、「周囲の人達から『イタいやつ』と思われないようにしている」という質問項目(4件法)を独立変数として投入すると、モデルの説明力は0.1%水準で有意となり(調整済みR2乗値は0.031), 対応する偏回帰係数も0.1%水準で有意となっている(結果表省略)。SNSの利用において他人の視線を強く意識する項目と有意な正の関係を示すことも同じ事情によるものだろう(「『匂わせ』を投稿したことがある」「自分が何かする時、SNS上での反応を気にすることがある」)。

第四に、このような敏感さは、ときとして感情表現を抑制する。「感情を素直に表せる」(4件法)を独立変数として投入すると、モデルの説明力は0.1%水準で有意となり(調整済みR2乗値は0.189), 対応する偏回帰係数は0.1%水準で有意な負の値となる(結果表省略)。つまり、感情を素直に表せる人ほど、自己多元性が低

くなるということだ。また「SNS上の自分は、本当の自分ではないと思う」という項目と多元性得点が正の関連性を示すのもそのような感情抑制の一面とみることができるかもしれない。

注意すべきは、以上のことが友人の数とはあまり関係がないということだ。2020年調査では友人を「親友」「仲のよい友人」「知り合い程度の友人」の三種類に分けてそれぞれの人数を尋ねている。この三つの人数を個別に重回帰分析に独立変数として投入してみたところ、いずれについても自己多元性との間に有意な関係を見いだせなかった。また「友達の数が多いほうがいい」(4件法)を独立変数として投入した場合にも、自己多元性との間に有意な関係を見出すことはできない(結果表省略)。つまり友人を数多く持ちたいという志向性は、自己の多元性と特段の関係を持たないということだ。

したがって、自己多元性が友人関係の変容に対応しているとしても、それは単純に友人数が増えたから使い分けの機会が増えた、といったものではない。関係の使い分けはもちろん多元化と相即的であるが、それにとりもなう関係に対する敏感さの上昇こそが多元性と密接に関連している。一方では相手の思っていることを外見から読み取る敏感さ、他方では相手からどのように思われているのかをつねに気にする敏感さ、これらの上昇が、場面ごとの相手への微細なチューニングをうながし、自己の多元化を推し進めているのではないかと考えられる。この敏感さの反面として、素朴に自分自身の感情を相手に向けて表現することがためられることになる。より敏感で、多元的な自己を維持している人ほどこのためらいを強く感じることになるだろう¹¹⁾。

4. 3 自分自身への再帰性との関係

ここでいう敏感さが他人に向けられたものであると同時に、自分自身に向けられたものであることに注意しておこう。相手を読み、自分を調整するというプロセスが自己の多元性を推し進めていくのだとしたら、自分自身に対する態度や働きかけの中に多元性と関連するものが見いだせるのではないか。

例えば、友人関係と自己への働きかけが交差する象徴的な装置としてスマホがある。実際、先の重回帰分析にスマホの利用時間を独立変数として追加投入すると、調整済みR2乗値は0.012(1%水準で有意)となり、利用時間は自己多元性得点に対して正の効果を持つ(1%水準で有意)。また、スマホの具体的な利用方法について尋ねた質問項目との関係を同様にみていくと、「自撮り」「アプリによる写真の加工」が自己多元性得点に対して正の効果(自撮りは5%水準、写真加工は1%水準で有意)をもつことが確認できる(いずれも調整済みR2乗値は5%水準で有意)。自撮りにせよアプリによる写真の加工(それらの多くは自分自身の写真への加工であろう)にせよ、これらは自分自身を対象化して、それに働きかけるという営みであり、これを再帰的な営みと呼ぶことができる。

そこでより一般的に再帰的な態度や意識のあり方に注目して自己の多元性との関係を確認する。ここで用いるのは、再帰性を測るために尋ねられた以下の質問項目である(いずれも4件法)。

- a) 自分のふるまい方が正しいかどうかをふりかえることがある
- b) 今日は当たり前であることが、明日もそうだとは限らないと感じる
- c) 大切なことを決めるときに、自分の中に複数の基準があって困ることがある
- d) これからの社会で生きていくために必要とされる力が、自分にあるかどうか心配になる
- e) 自分自身についてじっくり考えることがある
- f) SNSでの反応を予想して、自分のふるまい方を変えることがある

先の重回帰分析のモデル(基本属性のみのモデル)にa~fの各項目を追加投入すると、すべてのモデルにおいて説明力は0.1%水準で有意となり、a~fの項目は多元性得点に対して有意な正の効果を持つことが確認できる(すべて0.1%水準、結果表は省略)。

そこでa~fの各項目を足し合わせて標準化したものを再帰性得点とする(項目間のクロンバックのアルファは0.656)。この再帰性得点を重回帰分析に投入した結果が表9である。

表9 自己多元性得点を従属変数とする重回帰分析

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数
(Intercept)	8.768 ***
女性ダミー	-0.443 ***
年齢	-0.041
暮らし向き	0.046
入学難易度	0.012
大都市部ダミー	-0.094
再帰性得点	0.731 ***
調整済みR二乗値	0.139 ***

調整済みR2乗値は0.139 (0.1%水準で有意) であり、再帰性得点は自己多元性得点に対して0.1%水準で有意な正の効果を持っていることがわかる。すなわち、他人への敏感さと表裏の自分自身への敏感さのみならず、自分とその周囲の環境が今あるようにあり続けるとは限らない (偶有的である) という感覚が自己の多元性につながっているのである。このような偶有性への敏感さは、自己を今あるのとは異なったようにあり得るもの (「今こうしている自分だけが自分ではない」) として感受させることになろう。ここには場面ごとの関係への対応とは異なった多元性の道筋がみられる¹²⁾。

先に見たように、アンソニー・ギデンズは、再帰性が増進する現代社会においては、たとえ社会環境が流動化したとしてもその変化を通じた一貫性を再構築することで、自己の多元化は生じないだろうと論じている (Giddens 1991=2005)。それに対してここでの分析が示しているのは、むしろ再帰性の増大それ自体が多元性を推し進めていく可能性である¹³⁾。

4. 4 メディア・コンテンツとの関係

すでに友人関係をつなぐものとしてのメディアの効果についてはみてきたが、メディアにはもうひとつ重要な機能がある。それはコンテンツを提供するためのプラットフォームになるということだ。スマホを用いた自撮りや写真加工が自己の多元性と有意な正の関連を示すことは先に示したとおりであるが、それと同時にスマホ上でのニュース閲覧や雑誌・マンガの閲覧もまた多元性と有意な正の関連を持っている。つまり、スマホは関係メディアとしてのみならず、コンテンツ・メディアとしても自己の多元性と関係しているのである。

そこでより一般的にメディア上で提供されるコンテンツの享受と自己多元性得点の関係について確認してみる。基本モデルに以下の項目 (いずれも 2 件法) を独立変数として追加的に投入する。

- 生身の人間ではない、メディアや文学の中の登場人物に恋することがある
- テレビゲームの登場人物 (キャラクター) に思い入れを持ったことがある
- テレビ・舞台・SNSなどで見かける有名人に恋することがある

これらを投入したモデルの説明力はいずれも有意であり、各項目も有意な正の関係を示す。ここでは1つ目の項目 (生身の人間ではない、メディアや文学の中の登場人物に恋することがある) についてのみ結果表を示しておく (表10)。

表10 自己多元性得点を従属変数とする重回帰分析

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数
(Intercept)	8.384 ***
女性ダミー	-0.312 *
年齢	-0.061
暮らし向き	0.049
入学難易度	0.018
大都市部ダミー	-0.168
メディアの登場人物に恋する	0.785 ***
調整済みR二乗値	0.022 ***

複数の友人たちに異なった顔を見せているように、メディア・コンテンツ上のキャラクターに対するとき、人は日常生活におけるのとは別の自分を感じ取っているのかもしれない。

池上英子は仮想世界におけるアバターの存在に着目し、これを自己の多元性に結びつけて論じている（池上 2017, 池上・田中 2020）。すなわち「アバターは自分の中に存在する複数の分身であり、そのアバターがネットワークのように連なって、自分の個性を形作っている」というのである（池上・田中 2020:位置565 kindle版）。池上がこのようなアバターの複数性を、江戸の文芸や今日の落語と結びつけて論じていることからわかるように、ここにみられる「複数の分身」は、単につきあいの多元性に対応しているばかりでなく、現実の世界と仮想の世界、現実の世界と物語の世界といった境界線の横断にも対応している。ここでの分析結果が対応するのは、後者の意味での自己の多元性であると考えられる¹⁴⁾。

4. 5 自己多元性への三つの道

以上の分析から、自己の多元性が個人の基本的な属性によっては説明できないものの、三つの態度や意識と関係していることが確認された。すなわち、友人関係の使い分け、自己再帰的な態度、メディア・コンテンツへの愛着である。これらは重なり合いながらも少しずつ異なった経路で自己の多元性と結びついている。

友人関係の使い分けは、さまざまな場面への敏感な対応が、それによって生じる場面ごとの自己のあり方いずれを生じさせることによって自己を多元化させていく。自分とその環境とを再帰的に眺める態度の強さは、今あるのとは異なった自分・環境の可能性に目を開かせる。メディア・コンテンツへの没入は、日常生活とは異なった自己のあり方を虚構のあるいは物語の世界において可能にする。いずれもそれぞれの道筋にしたがって自己を多元化させていく可能性を持つのである。

では、これら三つの道筋のいずれが自己の多元性に対して最も大きな関連性を示すだろうか。以下の三つの変数を重回帰分析に投入することでそれを確認してみる。

(友人関係の使い分け)「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている」

(再帰性) 上で用いた再帰性得点

(メディア・コンテンツ)「生身の人間ではない、メディアや文学の中の登場人物に恋することがある」

結果を表11に示す。

表11 自己多元性得点を従属変数とする重回帰分析

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

	非標準化係数	標準化係数	VIF
(Intercept)	9.687	***	
女性ダミー	-0.447	-0.109 ***	1.042
年齢	-0.042	-0.020	1.049
暮らし向き	0.044	0.023	1.027
入学難易度	0.008	0.031	1.344
大都市部ダミー	-0.120	-0.026	1.369
友人使い分け	0.370	0.164 ***	1.048
再帰性	0.646	0.328 ***	1.077
メディアの登場人物に恋する	0.445	0.077 **	1.036
調整済みR二乗値	0.168	***	

調整済みR2乗値は0.168となりここまで確認してきたモデルの中でも最も高い説明力を示す(0.1%水準で有意)。友人関係使い分け、再帰性、メディア・コンテンツはそれぞれ有意な正の関係を示しているため、それらは相互に独立に自己多元性得点と関係を持つことが確認される(VIFより多重共線性も生じていないと判断される)。

標準化係数に着目すると、再帰性(0.328) > 友人関係の使い分け(0.164) > メディア・コンテンツ(0.077)となっている。すなわち、自己多元性得点に対して最も大きな関連性を示したのは再帰性得点であり、友人関係の使い分け、メディア・コンテンツがそれに続くということだ。2010年調査データの分析においては人間関係の流動化とその制御に焦点を当てたが、2020年調査のデータからは再帰性との関わりがより重要なものとして確認された。

5. 考察

以上の分析から、初発の問題設定に対して以下のように答えることができる。

まず、大学生の自己多元化の現状について、それはアイデンティティ資本として機能しているのか。すなわち多元化は彼らを取り巻く現状への適応としてみることができているのか。これについての答えは、ある程度までは肯定的である。自己多元性得点の高いものは、時間展望をより明確に持ち、ものごとにより主体的に関わろうとするという点でいえば、アイデンティティ資本としての機能を有するといえる。他方で、自分についての好感度との関係が負であることや対人関係スキルとは特段の関係を示さなかったこと(2010年調査データではいずれも正の関係がみられていた)などを考慮すると、アイデンティティ資本としての機能は限定されたものであるともいえる。

次に、この自己の多元性はどのような要因によって規定されているのか。この問いに対して、回答者の基本的な属性(性別、年齢、入学難易度、暮らし向き、大学所在地)から答えを与えることはできなかった。いわば物質的にも表現できるような基礎的条件の違いによって多元化したりしなかったりするわけではないということだ。そこで、他の意識や態度などとの関連を探ってみたところ友人関係の使い分け、再帰性、メディア・コンテンツという三つの要因との関連が確認された。三つはそれぞれ独立した経路で自己多元性と関わっており、その関係性の強さは再帰性 > 友人関係の使い分け > メディア・コンテンツとなる。これまで自己の多元化は、人間関係の変容から説明されることが多かったが、自己への再帰的な意識や態度の強まりがそれ以上に大きな役割を果たしていることが示唆された。

注

- 1) 社会学的自己論の概観については浅野 (2017) を参照。
- 2) バウマンやベックのいう「断片化」や「漂流」は、社会の中で周辺化された人々においてのみ現れるわけではない。「エリート」として社会の中心を占める人々においてもそれは困惑や苦悩としてあらわれる。この点についてセネットの議論を参照されたい (Sennett 1998=1999; 2006=2008)。
- 3) ギデンズはここで自己をたえず書き直される一冊の「自伝」になぞらえている。
- 4) 心理学における多元的自己のモデルとして杉浦 (2017) を参照。
- 5) 青少年研究会については以下のサイトを参照されたい。 <http://jysg.jp/>
- 6) 因子の個数は固有値, スクリーンプロット, 平行分析を用いて総合的に判断した。
- 7) 三つの項目はいずれも4件法で尋ねられている (そう思う～そう思わない)。足し合わせる際には「そう思う」が4点, 「そう思わない」が1点となるように調整している。
- 8) これらの項目には, 相川・藤田 (2004) で提示されている尺度の一部を用いた。
- 9) 2010年のデータで同様の分析を行った際には, これらに加えて「好きなことや趣味の活度に熱心になる」が含まれていた。2020年調査では, この項目は尋ねられていない。
- 10) ただし自己への好悪がどのような意味で適応的価値を持つのかについてはもう少し慎重な検討が必要かもしれない。例えば, 中間は自尊感情が必ずしも適応的価値をもつものではないという点についてさまざまな角度から検討している (中間 2016)。
- 11) 本稿では主題としないが, 多元性の高さは, スマホやSNSへの強迫性や不安をともなった没入と関連している。例えば, 「時間を忘れて, 夢中になってしまう」「他にやらなければいけないことがあっても, つい使ってしまう」「使ったあと時間を無駄にしたと思う」「SNSのメッセージのやり取りを止めたいのに止められないことがある」「SNSをチェックできないと不安になる」といった項目との間に有意な正の関係が見いだされる。
- 12) 自己多元性が「日記のような意味合いでSNSに投稿する」という項目と正の関係を示すのも再帰性のひとつの側面と見ることができるかもしれない。
- 13) 再帰性が相対化を含意する点に注目すると, 自己多元性が自己への好悪に対して負の関係を持っていることについて別の見方をすることができるかもしれない。例えば, 思春期において自尊感情が下がることが知られており, これが批判的思考の発達と関連していることを示唆する研究がある (加藤他 2018)。
- 14) 作家の平野啓一郎は, 人が本来複数の自分のゆるやかなつながりとしてなりたっていると論じ, これを「分人」と呼んだ (平野 2012)。この概念は, 彼の作品の鍵概念の一つであるが, 最近の作品ではそれが仮想世界の「アバター」と結びつけられて登場している (平野 2021)。

付記

本研究はJSPS科研費JP19H00606の助成を受けたものです。

文献

- 相川充・藤田正美, 2004, 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成」『東京学芸大学紀要1部門』56: 87-93.
- 浅野智彦, 2011, 「大学生の生活と意識 (4) 多元的自己とアイデンティティ資本」, 第84回日本社会学会大会報告
- , 2017, 「自己と社会」盛山和夫他編著『社会学入門』ミネルヴァ書房, 17-32.
- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Oxford: Polity Press. (森田典正訳, 2001, 『リキッド・モダニティ』大月書店.)
- and Vecchi, Benedetto, 2004, *Identity*, Oxford: Polity Press. (伊藤茂訳, 2007, 『アイデンティティ』日本経済評論社.)
- Beck, Ulrich und Bonß, Wolfgang hrsg., 2001, *Die Modernisierung der Moderne*, Berlin: Suhrkamp Verlag.
- Cote, James., 2005, “Identity capital, social capital and the wider benefits of learning”, *London Review of Education*, Vol3 No.3: 221-237.
- and Levine, Charles, 2002, *Identity Formation, Agency, and Culture*, Mahwah: Lawrence Earlbaum Associates.
- Elliott, Anthony, 2013, *Reinvention*, London: Routledge.

- , 2015, *Identity Troubles*, London: Routledge.
- and Urry, John, 2010, *Mobile Lives*, London: Routledge. (遠藤英樹監訳, 2016, 『モバイル・ライヴズ』ミネルヴァ書房.)
- Gergen, Kenneth, 1991, *Saturated Self*, New York: Basic Books.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity*, Redwood: Stanford University Press. (2005, 秋吉・安藤・筒井訳, 『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.)
- 平野啓一郎, 2012, 『私とは何か』講談社.
- , 2021, 『本心』文藝春秋.
- 池上英子, 2017, 『ハイパーワールド』NTT出版.
- ・田中優子, 2020, 『江戸とアバター』朝日新聞社.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里, 2018, 「思春期になぜ自尊感情が下がるのか?」『青年心理学研究』30: 25-40.
- 中間玲子, 2016, 『自尊感情の心理学』金子書房.
- Sennett, Richard, 1998, *The Corrosion of Character*, New York: W.W. Norton & Co. (齋藤秀正訳, 1999, 『それでも新資本主義についていくか』ダイヤモンド社.)
- , 2006, *The Culture of the New Capitalism*, Yale University Press. (森田典正訳, 2008, 『不安な経済／漂流する個人』大月書店.)
- 杉浦健, 2017, 『多元的自己の心理学』金子書房.